

九州朝日放送番組審議会議事概要（10月分）

| | |
|-------|--|
| 第597回 | 九州朝日放送番組審議会 議事概要 |
| 開催年月日 | 平成29年10月11日（水） 午後4時00分～5時40分 |
| 開催場所 | 九州朝日放送 本社役員会議室 |
| 出席者 | <p>委員総数 8名 出席委員数 8名</p> <p>（出席委員） 古宮 洋二委員長、野田 幸之輔副委員長 鶴 利絵委員、池田 勝委員 安恒 万記委員、井手 雅春委員 戸田 康一郎委員、守田 有理子委員</p> <p>（放送事業者側出席者名） 代表取締役社長 和氣 靖 常務取締役 二木 清彦 取締役編成制作局長 清水 透 報道局長 臼井 賢一郎 ラジオ局長 園田 哲也 報道局報道部 部長 柴田 高宏</p> <p>視聴者・広報室長兼審議事務局 奥園 徹 視聴者・広報室兼審議事務局 松永 俊郎</p> |
| 議題 | <p><テレビ番組> 「第21回KBC水と緑のキャンペーン 水と緑の物語 ～守りたいモノ つなぐコト～ あの時は 九州豪雨一か月」 放送日：8月5日（土）昼0時 ～ 0時50分 について</p> <ol style="list-style-type: none"> 平成29年度上期の番組種別の公表報告 平成29年10・11月 ラジオ・テレビ番組編成状況 平成29年9月 視聴者・聴取者応答状況の報告 次回平成29年11月度（第598回）審議会日程 11月20日（月）午後3時30分～開催 <課題>テレビ番組 ダイワハウススペシャル 「沖ノ島～藤原新也が見た祈りの原点～」について 放送日：7月2日（日）午後3時30分 ～ 4時30分 その他 |
| 議事の概要 | <p>◎委員の意見（概要）</p> <p>委員からは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○被災された方や自治体、気象官など多岐に取材をし、よい構成になっていたと思う。各自治体が置かれている状況が異なることもよく分かった。国や地方自治体がいづ発生するかわからないような災害への危機管理のために費用をかけ整備するのも限界がある。だからこそ各人が危機管理能力を高めるために警鐘を鳴らすうえで、重要な役割を担ったと思う。 ○刻々と変化した当時の状況が時系列で並べられて理解しやすかったし、迫力ある言葉と映像は、まるで自分がその場にいるかのような臨場感を感じた。そうした状況の中で、いろいろな人が知恵を絞り行動したことがよく分かった。「自分だったらどうする？」と視聴者に自問させたと思う。 ○自然に対する怖さや弱さを表現しながらも、SNSや地域コミュニティを活用した人々の様子からは、人と人のつながりが命を救ったり、励みになったこと等が映し出されており、人間の強さを上手に表現されていたと思った。 ○林道で孤立し、ドローンを飛ばして撮影した映像をSNSで拡散させ自衛隊の救助につなげた人の話などは、災害に巻き込まれてもSNS等を利用して救助を求める方法があることを報道したことは今後の災害発生時に大変役に立つ有意義な情報だった。 ○SNSにより個人で情報を発信できる時代にはなったが、それらの情報は「点」にすぎない。テレビやラジオでは、それらの情報を全体的にみて点と点をつなげ、線をつなげることににより問題を投げかける役割があるのではないかと思った。 ○「自助」「公助」「共助」とあるが、大きな災害になればなるほど公助は求められない。まず「自助」で何ができるのか知っておくことが大切であり、次に共助として日ごろから考えておく必要がある中で、非常に良い番組づくりだった。また、東峰村の「高齢者が多いから避難はさせない」という判断等からは、行政と地域社会の連動により被害の最小化が可能であるということの事例、すなわち防災ではなく減災にむけた良いヒントになったと思う。 <p style="text-align: right;">などの評価を頂きました。</p> <p>また、気になる点や望むこととして、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○午後5時50分に大雨特別警報が出されたが、市全体への避難指示は午後7時10分まで出ず、行政による避難指示が遅かったのではないかと疑問が提示されていた朝倉市は、市長が取材に応じ、細かな地域ごとの避難指示を行う必要があるかどうか検証が必要としながらも「対応は適正だった」と答えていた。行政がどの段階で何を自衛に各エリアに避難指示を出していたのかは、最も知りたい核心の部分でもあった。 ○個々のテーマで取り上げた人たちの判断がほんとに正しかったのか、もっと良い選択がありえたのかについて判断に苦しむ場面が見えられた。それぞれについて専門家の見解を聞いて補強してはどうだったか。 ○ニュースや天気予報で「泥水が出たら土砂崩れの前兆、命を守ってください」と警告している放送局側が、あの状況の下で取材を行ったことは、水の怖さを知らないのではないかと、無謀だと感じた。報道も大事だが社員の命が一番大事ではないかと思った。取材の安全管理のあり方に疑問を持った。 ○「大雨特別警報」は従来の「大雨警報」との違いがピンとこない。インパクトもない。初歩的な知識がない人でもわかりやすいよう「非常事態」を想起させるような名称の工夫が必要ではないか。テレビも視聴者に対して訴えかけるようなわかりやすいメッセージを考えてほしい。 <p style="text-align: right;">などの批評や提言を頂きました。</p> <p>これらに対して、担当者から、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○朝倉市長のインタビューについては、収録が被災からあまり間もない時期であった。行政側が被災者への対応や復旧活動を最優先に動いている中でもあり、行政自体が初動の判断の是非を検証しきれていないタイミングであったため、インタビューにおいて責任の追及が不十分な印象を与えたのかも知れない。 ○結果として危険な現場へ記者を派遣したことについては、異常気象や記録的短時間大雨情報が発見される中、当日は福岡市が台風一過の晴天であったこともあり油断をしていた点は否めず反省している。今回の取材における経験を教訓に、系列の安全管理マニュアルを改訂するなど、安全管理のさらなる充実に努めている。 ○「水と緑の物語」では毎年広い意味での環境キャンペーンとして様々な課題に取り組み幅を設け、伝えたいメッセージと併せて紹介を続けている。1年に一度8時間の生放送「水と緑の物語」は地域に対してしっかりとしたプレゼンスを示すものだと考えている。地域に寄り添うという大きなコンセプトはあるし、今回の九州豪雨を取り扱うにしても合致している部分だと思ふ。 ○「水と緑の物語」は自然とどう向き合うのか、故郷とどう向き合うのかという視点で、また幅広く向き合うあたり、直近で発生した「九州豪雨」を発生から1カ月というタイミングで伝えないわけにはいかないと思い、予定を変更して制作にあたった。 <p style="text-align: right;">などの説明をしました。</p> |